

推薦の言葉

待ちに待った素晴らしい本が出版された。

排尿障害はプライマリ・ケアの現場では極めてコモンな問題であるが、実際には苦手としている医師が多い。正直に言うと私もその部類に入る。頻尿を訴える患者に対して、原因の精査をするわけでもなく、漠然と抗コリン薬を長期にわたり処方してはいないだろうか？「排尿に問題が…」と患者が話し出した次の瞬間に、すべてを泌尿器科医に丸投げはしていないだろうか？命にかかわらないことだからとか、少し我慢すればいいことだからなどと言って、診療の多忙さを理由にして対応を後回しにしてはいないだろうか？ただでさえ人に言いにくい「しもに関する問題」を、勇気を出して話してくれた患者に対して、診察室で適当にお茶を濁してはいないだろうか？

超高齢社会のなかで、排尿障害は、誤嚥、易転倒性、認知症などとともに、高齢者のクオリティ・オブ・ライフを大きく左右する極めて重要な問題である。皆そんなことは十分わかっているはずではあるが、なぜそのような対応になってしまふのだろう。その理由は明らかである。そもそも適切な対応方法を学んでいないのである。

近年、排尿障害に関して書かれた類書は増えてはいるが、本書はそのなかでも特別な意味をもつ。著者が「序」で記しているように、本書はまさに「プライマリ・ケア医は排尿障害の診療にどう向き合うか？」の一点に話の焦点が絞られ、熟練の泌尿器科医の思考と技能が、泌尿器科を専門としていない私たちにとっても、明日から利用できる形で見事に落とし込まれているからである。百聞は一見に如かず。ページを少しだけめくつていただければ、その明瞭かつ柔らかな語り口に引き込まれ、目から鱗の実践的知識が自然に身についてくることに、すぐに気がつくはずである。また、読み進んでいくうちに、「患者のための医療とはどのようにあるべきなのか」という、本書に一貫して流れている筆者の熱い思いにも心動かされることであろう。

本書の著者である影山慎二先生とは、以前プライマリ・ケア医向けのセ

ミナーでご一緒させていただく機会を得たが、講演内容が素晴らしい、心底感銘を受けたことを覚えている。そのときに、次にこのような本が企画されるのであれば、その著者は影山先生をおいて他にはないと確信をしていたが、今まさにそれが実現したというわけである。

巷に溢れる数多くの出版物のなか、本書はプライマリ・ケアの現場で働くすべての医師に対して自信をもって薦められる、排尿障害に関する比類のない良書である。本書は患者中心の医療を展開する医師にとって、大切な一冊となるであろう。

2016年8月

大阪医科大学地域総合医療科学寄附講座
大阪医科大学附属病院総合診療科

鈴木富雄